

反知性主義

反知性主義

アメリカの歴史を決定しているのは、二種類の勢力の争いである。一つは旧世界、ヨーロッパの伝統をアメリカに持ち込もうとする人々であり、もう一つは、ヨーロッパ的な伝統から抜け出して、本当の意味での新世界を実現しようとする人々である。

基本的には、前者が後者を圧倒している。ある人々は、旧世界で実現できなかった理想を、新世界で実現しようと考えている。別の人々は、そのような古臭い理想こそが捨て去られるべきだと考えている。これはたとえば、南北戦争において露わになった対立とも関係がある。また、近年のトランプ現象もその一例であろう。ジャクソン大統領以来、事あるごとに反復されてきた対立の構図である。

一般的には彼らは、つまりトランプやジャクソンや南部連合は、反知性主義と呼ばれている。だがそれは、正確に言うならば、反ヨーロッパ主義である。そして、西洋文明こそが知性の源であるという考えは、その文明に属する人々の思い上がりすぎない。本当に知性を希求しているのは、反知性主義者の方であろう。自らを知性的と自称する人々は、無知の中に安住しているだけである。

アメリカにおいては、リベラリストこそが保守である。それは、旧世界の古びた伝統を、新世界に接ぎ木しようとする無粋者である。ア

メリカに必要なものは、ヨーロッパからの自由である。真に正しいものの、新しいものの追求である。

西洋人は、あらゆる過ちをアメリカに持ち込んだ。それは殺戮を生み、奴隷を生み、数多くの戦争を生んだ。合衆国憲法は、アメリカを縛るくびきである。それは、彼らが正しい道を歩むことを妨げている。

植民地

1

太平洋戦争は明らかに日本の勝ちである。それをアメリカの勝ちだと思いきこんでいる人間が多いのは、日本が降伏したから日本の負けなのだ、と単純に考えているせいだろう。

たとえば将棋であれば、どちらが勝ったのかはひと目で分かる。王将を取ったほうが勝ちなのだから、これは分かりやすい。しかし、囲碁の勝負ならば、どちらが勝ったのか素人目には分からない。勝ち負けの判定をするのにも、専門的な知識が必要なのである。

実際の戦争は囲碁に近い。どちらが勝ったのかということは、後世の判断を待たなければならぬ。歴史家が研究を重ねた上で、慎重に判断を下すべき事柄である。降伏したから負けだ、というほど簡単な

問題ではない。

私はいまだかつて、なぜ日本が負けたと言えるのか、という説明を聞いたことがない。日本が負けたことは全ての前提であり、その根拠を問うということを、誰もしてこなかったのではないか。

2

我々がそれを日本の負けだと思い込んでるのは、アメリカが自分たちの勝利を主張しているからでもある。アメリカ人は宣伝がうまいので、あの戦争は彼らの勝ちだということになってしまった。

しかし、日本人にとっては、それでもよかったわけである。日米同盟の片務性は、アメリカの勝利に由来するものである。本来ならば日本が担うべき極東地域の安全保障を、アメリカが肩代わりする形になっているのだから、日本にとっては得でしかない。

つまり、本当はアメリカは勝っていないのに、彼らが勝ったということにしてしまったので、そのツケを払わされているわけである。これを理解するためには、本当にアメリカが勝っていたならば、日本はどうなっていたのか、ということを考えてみなければならない。

その場合、日本はアメリカの植民地となり、アメリカの領土とされていたであろう。それならば、アメリカが極東地域の安全保障を担うことも、不自然ではなかっただろう。

3

だが、ここにはやはり、ある種の違和感が付きまとう。そもそも、日本を植民地にすることにどんな意味があるのか。本当にそれがアメ

リカの利益になることなのか。いったい、植民地経営には何の意味があるのだろうか。

基本的に、植民地経営には意味がない。南米や中東、東南アジアを植民地にするよりも、それらの地域を独立国と認めて自由貿易を行うほうが、つまり、現在ののような国際環境のほうが、よっぽど利益が上がるのである。経済的な利益という点から見れば、植民地はないほうがよい。では、どうして西洋人は、何百年もの間、これらの地域を植民地として統治し続けてきたのか。

それは、神のためである。キリスト教を知らない野蛮人に神の言葉を伝え、文明を伝えるために、彼らは植民地を作ったのである。それは、どんな利益にも勝る神聖な仕事であった。そして、太平洋戦争の背後にも、これと全く同じ情熱が隠されていたのである。

はつきり言って、キリスト教徒は間違いである。彼らの考えることは、狂っているとしか言いようがない。植民地時代のヨーロッパやアメリカの人々が、植民地をどのように考えていたかということは、当時の新聞などを見ればよく分かる。様々な歴史資料に、彼らの主張ははつきりと残されている。それは、現代の目から見れば異常なものに見える。

しかし、実際はそうではない。それは、過去のものだから異常なのではない。それが西洋人のものだから、異常なのである。過去においても現在においても、西洋人のものの考え方は全く変わっていない。彼らは今でも間違いである。そして、過去においても現在においても、日本人の考えることはまともである。異常なのはいつでも西洋人のほうである。

日本の安全保障にとって最も大きな問題は、アメリカである。朝鮮人が核兵器を持つのが大陸間弾道弾を持つのが、日本の安全保障に

とっては大した問題ではない。なぜならば、朝鮮人は人間だからである。しかし、アメリカ人が核ミサイルを大量に保有しているということとは、本当に問題である。なぜならば、彼らは間違いだからである。

日本人は、この現実をはつきりと認識しなければならない。信じたくない人もいるかもしれないが、現実を直視しなければ、国際政治を乗り切ることができない。日本の舵取りを担う人物には、冷静な現状認識が求められるのである。

本当ならば、あの戦争において、我々はアメリカに引導を渡しておかねばならなかった。彼らを完膚なきまでに叩きのめさなければならなかった。それができずに、あまつさえ核武装までも許してしまっただけというのは、これは日本の罪である。アジアの雄を自任しておきながら、これほど恥ずかしいことはない。

仙台市の観光資源

1

戊辰戦争のとき、仙台藩は奥羽越列藩同盟の盟主として戦いに参加し、千人以上の戦死者を出した。彼らの魂を弔うための石碑が、伊達家の霊廟である瑞鳳殿の境内に、いまも立っている。瑞鳳殿には外国人の観光客もよく来ているようだが、彼らがどれだけその場所を理解できているのか、はなはだ心もとない。戊辰戦争の弔魂碑などは、ラストサムライの記念碑だとかいうことにして、面白おかしく紹介することもできるのではないか。

東北の人々にとっては、戊辰戦争は負の歴史として語られがちである。だが見方を変えれば、それも立派な観光資源になりうるのである。將軍のために命がけで戦うサムライというものには、どこかロマンを掻き立てるものがある。

2

勝てば官軍ということで、明治時代には薩摩や長州の藩閥が幅を利かせていた。東北諸藩の出身者はその割を食うことになり、そのことから、明治政府に刃を向けた祖先を疎んじる気持ち、自然と芽生えてくるようになる。

しかし、別に明治政府に大義があったわけではない。そもそも、幕府が開国を決断したのに対して、朝廷は攘夷を主張し、そこから幕府と朝廷の対立が生じた。その朝廷を支持する形で明治政府が生まれたにもかかわらず、当の新政府は普通に開国してしまった。その結果から見れば、どうして旧幕府軍が倒されねばならなかったのか、が分から

ない。開国を主張する者が朝敵であり賊軍であるならば、官軍こそが賊軍だったわけである。

さらに言えば、武士である以上は、主君に忠義を誓わなければならない。主従の關係がないがしろにされるならば、武士の存在意義は無くなってしまう。したがって、主上である徳川將軍家に齒向かう薩長こそが、武士の本分を忘れた不心得者であり、大義は列藩同盟の方にあることになる。

私は、明治維新の一番の問題点は、まともな戦いが行われなかったことだと思う。そしてその理由は、官軍に大義が欠けていたからなのではないか。幕府側がどれだけ大義を振りかざしても、官軍はそれに答えるだけの大義を持ち合わせていなかった。だからこそ、そもそも衝突の起こりようがなかったのである。この戦いには、何のために戦うのかという目的が欠けており、どこか馴れ合いのような雰囲気さえ感じられる。はつきり言って、面白くない。

本当は、旧幕府軍と新政府軍の間で、思想的な対決が行われるべきであった。どちらが正しいのか、という大義と大義のぶつかり合いが演じられるべきであった。そのために犠牲が必要ならば、どれだけの死者が出て構わなかったと思う。しかし実際はそうならず、下手な出来レースが演出されただけである。その後の日本の進路を決定付ける思想のなさというものが、ここにすでに現れているのではないか。

勝海舟は、氷川清話の中で度々新政府を批判し、徳川時代を懐かしんでいるが、それも理由のないことではなかったのである。

3

仙台は学都と呼ばれることもあるが、昔は軍都と呼ばれることが多かった。戊辰戦争ののち、東北鎮台が仙台に置かれ、それが第二師団

へと名前を変えた。そして、様々な日本軍の施設がその周辺に集められた。ある資料によれば、仙台市街の半分以上の土地が、軍関係の施設によって占められていたという。

第二師団は、帝国陸軍きつての精兵として知られている。また、宮城野原にあった仙台陸軍幼年学校の著名な卒業生として、石原莞爾がいる。彼は、現在の榴ヶ岡公園に置かれていた、歩兵第四連隊の連隊長を務めていたこともある。その兵舎の一棟はいまでも残されており、歴史民俗資料館として一般に公開されている。

中国近代文学の礎を築いた魯迅は、仙台医学専門学校に留学し、ここで藤野先生と出会っている。また、宮城県栗原市には、安重根の看守であった千葉十七にちなんで、安の顕彰碑が建っている。こうして見てくると、宮城県には、近代アジア主義揺籃の地、という側面もあることが分かる。

一つの町には一つの歴史がある。その歴史を見直すことから、地域の再生は始まるのではないか。戊辰戦争の過去も、軍都であった過去も、忘れるべきではない。むしろ、それを武器に変えるような強かさが必要である。

西と東

東北の山は貧しい。

西日本の山に入ると、頭の上から鳥の声が聞こえてくる。山の中は生き物の音に満ちている。一方で、東北の山は物音一つしない。ときどき遠くから鳥の声がするくらいで、静かなものである。日本の自然は、西と東ではだいぶ違う。同じ国だとは思えないくらいである。

私は一時期、浜松にいたことがある。浜松の町を歩いてみて一番驚いたことは、街路樹がクスノキだったことである。東北の人間にとって、クスノキは珍しいものである。大きな公園などに時々生えているくらいで、自生はしない。東京でも、クスノキはそれほど多くはない。それが当たり前のように生えているというのが、私には衝撃だった。街路樹といえば、熊野に詣でるために、和歌山の新宮市を訪れたときには驚いた。この町は、街路樹がナギなのである。ナギは針葉樹だが、葉は幅が広い。葉が広い針葉樹というイチヨウが思い浮かぶが、ナギの葉っぱはイチヨウよりも肉厚で、存在感がある。非常にたくましい感じのする樹である。熊野神社の御神木でもあり、正確には、神社の参道にナギが植えられていたようである。どこまでも続くナギの並木は壮観であった。これも南方の植物で、東日本には少ない。

少し愚痴のようにもなるが、熊野の温泉に入ったときに、辟易したことがある。私が湯船に浸かっていると、すぐ隣に別の人が入ってきたのである。東北では、先に人が入っていたら、少し間を空けて入る。関西は、東北よりもパーソナルスペースが狭いようである。おそらく、人口密度の高さがそうさせているのだろう。

私が泊まったのは川湯温泉だった。名前の通り、河原の砂利の間から、自然に温泉が湧き出している。その湯溜まりのなかに、蚊の死骸がたくさん浮いていた。こんな温泉は他にない。熊野は奇妙な土地である。

このように自然を眺めてみると、日本は一つの国ではない、ということがよく分かる。この土地に住む人々の絶え間ない努力によって、国のまとまりが保たれているのである。それが和を貴ぶということであらう。

世代論

団塊の世代の親は復員兵である。戦場で戦っていた兵隊たちが日本に帰ってきて、子供を作った。それが団塊の世代である。実際に戦地で戦ってきた人たちには、どこか明るさがある。あっけらかんとしていて、楽しそうに戦争の話をすることもある。

一方で、戦争に行き損ねた人たち、つまり、終戦時に十代の学生だったような人たちには、どこか屈託がある。きつい言い方をすれば、人格が歪んでいる。戦時下で皇国教育を受け、戦後はGHQの統治を経験したのだから、当然と言えば当然である。吉本隆明がこの世代の代表例で、虚無的というか、二重人格的で複雑な性格をしている。そしてその性格は、少なからず子供の世代にも影響を与えていると思う。彼らの子供はしらせ世代に当たる。代表例は安倍晋三だろうか。安倍晋三という人間には、その無責任さという点において、ゆとり世代に通じるものがあるように見える。ここにも親子関係があると考えるのは、少し強引かもしれない。

私の理解では、日本社会の世代というものは、テイラミスのような構造になっている。団塊の世代としらせ世代が交互に現れて、縞模様を作っている。ずいぶん勝手なことを言うようだが、世代論とは勝手なものである。

教育とは何か

1

私にとって教育とは、階段から突き落とすことである。

論語に、「これを如何せん、これを如何せんと言わざるものは、我これを如何ともすること無きのみ」という言葉がある。つまり、自分で問題意識を持たない人間は、教育のしようがない、ということである。だから、まず問題意識を持たせる必要がある。そのためには、一度崖から突き落として、自分で這い上がってくるように仕向けるしかない。それが上手くできるかどうかで、教育の成果は変わってくると思う。

2

また、教育においては、見返りを求めてはならない。教育とは、知恵を授けることである。ものの道理を教えることである。そして、ものの道理とは何かといえば、他人を思いやるということである。つまり道徳である。

自分のことしか考えない人間は、結局上手く行かない。本当に成功するのは、自分のことだけでなく、他人のことを思いやる人間である。それが現実である。それを理解することが知恵であり、それを人に教えることが教育である。

したがって、人にものを教えるということは、施しを教えるということである。自分のものを他人に与えるということ、しかも、見返りを求めずに与えるということ、私が人に教えるべきことは、結局そういうことである。ゆえに、私が教育の見返りを求めるならば、私の行

動が、私の言葉を裏切ってしまうことになる。よって、教育の見返りを求めてはならない。なぜならば、教育こそが施しだからである。

ものの道理を知ることとは、すべての人間にとって最も価値のあることである。だからこそ、教育は最上の施しでなければならない。

3

ときどき、アメリカやヨーロッパの人々と競争しようと考えてる日本人がいるが、それは間違っている。なぜならば、西洋人よりも、日本人の方が圧倒的に優れているからである。ゆえに、ともに勝負をすれば我々が勝つに決まっている。だから、そんな大人げないことはするべきではない。

昔の日本人の間違ひはそこにあった。競争すべきでない相手と競争しようとしたのである。そうではなく、我々は、彼らを教育しよう、と考えるべきであった。

我々には知恵があり、彼らにはそれが欠けているのだから、我々の方が、彼らにそれを与えてやらねばならない。我々がすべきことは、彼らを負かすことではなく、彼らをよりよい状態へと導いてやることである。我々は、彼らに知恵を施さねばならない。それが日本人の使命である。

プロパガンダ

福島産の作物に対する風評被害は、いまでも続いている。科学的な調査によって安全性は保障されているにもかかわらず、それはなかなか認知されない。そこで、調査の結果をどれだけ丁寧に説明しても、大して効果はない。

私は、次のような方法が有効ではないかと考える。たとえば、映画を作る。テーマは何でもよく、ヒーローアクションでも、サスペンスドラマでもよい。そういう娯楽大作を作って、その中の、本筋とは全く関係ないところに、さりげなく、福島産の野菜は安全だ、という情報を、その根拠と共に入れておくのである。話の筋を追うことに夢中になっている観客は、その情報を意識しないが、記憶の中には残っている。そういう具合に、情報を紛れ込ませる技術が必要である。

それはプロパガンダではないか、と言う人がいるかもしれない。そのとおりである。しかし、本当のことを言っているのだから問題はない。プロパガンダによって嘘の情報を広めることは問題だが、本当の情報を広めることには何の問題もない。だから、嘘をつかないようにする、ということも重要である。

仏教ではこれを方便と言う。お寺では現世利益ということを盛んに言って、お守りを買ったり祈禱をあげたりしているが、あれは人を釣るための手段である。甘い言葉で人を引き寄せておいて、その中にさりげなく、仏の教えを紛れ込ませておくのである。そうすると、人の心の中に、それが自然と染み込んでゆくようになる。これが方便である。

それも、現世利益が嘘であれば問題である。しかし、仏の教えを信じることは、確実に現世利益をもたらすのだから、問題はない。つま

り、方便は真実でなければならない。嘘は方便ではない。ある意味では、仏の教えは全て方便である。

万里の長城

現在の中国は南北朝時代である。清朝から禅定を受けた、中華の正統王朝たる中華民国は南方の台湾に依り、篡奪者たる北朝の中国共産党と対立している。このような状況で、日本政府がとるべき立場はいかなるものか。我々はどちらの王朝に協力するべきか。

アジアの安定のために我々が心掛けるべきことは、漢民族の境界を定めることである。漢民族の生存範囲は、長城線の内側でなければならない。我々は、漢民族の無制限の膨張を許してはならない。それは確実にアジアの安定を乱すだろう。

そのために、我々は台湾政府に協力するべきである。我々は、国民政府が中国を統一するべきだとは考えないし、それが可能であるとも考えない。しかし、共産党に対する抑止力として、国民政府には利用価値がある。漢民族を長城線の内側に押し返すために、我々は中国の南北分裂を利用しなければならない。

この点に関して、我々はロシアの協力を期待することができる。満洲は仕方ないとしても、沿海州を漢民族に渡す必要はない。中国とロシアの国境を新しい長城線にするべきである。

南モンゴルに関しては、問題は微妙である。モンゴル高原は、ゴビ砂漠を挟んで南北二つに分けられる。北がモンゴル国であり、南が中国領内モンゴル自治区である。本来の長城線は南モンゴルと山西省・河北省の間にあり、私は現在でもそこにあるべきだと思うが、現実問題として、南北モンゴルの境界にまで北上させるべきなのかもしれない。

い。南モンゴルの中国化がどこまで進んでいるのか、私には判断できない。

東トルキスタンとチベットの独立は認められるべきである。これらの地域は漢民族の領域ではなく、いかなる中国化の試みも許されない。すでにこれらの地域に居住している漢民族の処遇に関しては、それぞれの政府に委ねられるべきである。

また、千島列島は日本の領土であり、ロシアによる占領は不当である。漢民族同様、ロシア民族の膨張も度を越すべきではない。ロシア人の生存権を確保したのであれば、まず近隣諸国との共存の道を探すべきであろう。言い古された言葉だが、強欲は破滅のもとである。我々には、ロシアの安全保障を脅かす意図はないし、また、アメリカがそうすることを許すつもりもない。日本列島の主権は日本国民の手中にあり、他のいかなる勢力がそれを脅かそうとも、我々は全力でそれを守り抜くだろう。千島列島が日本に返還された後でも、国後水道を通過するロシア船舶の安全は、日本国民が保証する。

以上の事柄をつつがなく実現するために、日本国民はアメリカ政府に対して全面攻勢に出なければならない。あらゆる手段を駆使して、東アジアにおけるアメリカ政府とアメリカ軍の地位を抹消するべきである。なぜならば、これらの問題を理解するだけの知能をアメリカ人は持ち合わせておらず、彼らの存在は、必ず我々の行動を妨害することになるからである。

では、千島を日本に返すことで、ロシア人に何の得があるのかといえば、彼らには天皇陛下の前に跪く権利が与えられる。ロシアの皇帝は滅ぼされ、中国の皇帝も滅ぼされた。唯一勝ち残ったのは日本の天皇である。ゆえに、天皇陛下は全アジアの皇帝であらせられる。

障害と悪

1

障害を持つことはよくないことである。不幸なことである。病気になることはよくないことである。不幸なことである。よくないことをよいと言うべきではない。悪くないことを悪いと言うべきではない。障害者が生きていることは悪いことではない。障害者を殺すことは悪いことである。悪いことをすることが悪いことであって、悪いことをしないことは悪いことではない。

私は障害者になりたいとは思わないが、だからといって、障害者を殺してよい、ということにはならない。そこには道理が欠けている。私は、生命は尊重されるべきだ、とは思わない。しかし、生きているものを殺すことは悪いことである。

善悪は行為の名前である。存在の名前ではない。生きているということは、それ自体でよいことであるわけではない。また、それ自体で悪いことであるわけでもない。

悪い行いをした人間には悪い意思があったのだ、という考えは一つの仮説に過ぎない。そのような意思があったのであれ、なかったのであれ、悪いものは悪い。意思の善悪と行為の善悪は分けて考えねばならない。そして、意思もまた一つの行為である。

2

もしも、障害者が悪事を犯すならば、彼は処罰されるべきである。しかし、そうでないならば、処罰されるべきではない。ゆえに、もしも、経済的に自立していないことが悪事とみなされるならば、自立し

ていない障害者は処罰されるべきだ、ということになる。問題の本質は、現在の日本社会において、金を稼がないことは悪だ、と考える人が増えていることである。しかし実際には、金を稼ぐことは良いことではないし、金を稼がないことは悪いことではない。

ここに見られるのは、貨幣への信仰である。正確に言えば、金を稼がないことが悪だと考えられているわけではない。そうではなく、金を稼ごうとしないこと、貨幣への意志を持たないことが悪だと考えられているのである。これは、神への信仰を持たないことが悪だと見なされることと相似である。

現代社会の本質は貨幣への信仰である。そして、それはキリスト教の信仰と同一である。あるいは、ユダヤ教の信仰と同一だ、と言ったほうがより正確かもしれない。

3

ヒトラーはある意味では正しかった。ユダヤ教には問題がある。ヒトラーの誤りは、ユダヤ人の遺伝子に問題があると考えたことである。だが実際には、ユダヤの宗教に問題があるにすぎない。そのため、ユダヤ人をどれだけ殺しても、問題は解決しない。破壊するべきはユダヤの遺伝子ではなく、ユダヤの宗教である。

ヒトラーの中には、善なるものへの意志がある。それは否定されるべきではない。否定されるべきは、彼が犯した誤りである。ユダヤの宗教や文化に問題があることは、否定されるべきではない。しかし、ユダヤ人の虐殺は否定されるべきである。

彼らの宗教には、誤りを犯すことへの意志がある。無知への意志がある。それは徹底的に否定されねばならない。ユダヤ人の虐殺によっ

て、ユダヤの信仰が正当化されるわけではない。誰かの犠牲によって、他の何かが正当化されることは決してありえない。

ヒトラーの間違ひはもう一つある。ユダヤ的なものが否定されるべきならば、当然キリスト教も否定されねばならない。そこまで踏み込めなかったことが、彼の限界である。

また、これは言う必要のないことかもしれないが、念のために言っておく。アメリカ人には、ヒトラーを擁護する私の意見を非難する権利はない。なぜならば、フランクリン・D・ルーズベルトには、ヒトラーと同じ意図をもって日本に対する戦争を始めた疑いがあるからである。私を非難するのは、彼の潔白を証明した後にもういいたい。

中論

反復可能性は科学の本質ではない。なぜならば、反復可能な実験など存在しないからである。我々は、ある程度条件の揃った実験を、近似的に同一の条件下で行われたものとみなしているだけである。科学の本質は因果律である。それは、同一の原因から同一の結果が生じる、という原則であり、その原則を信じているからこそ、実験の反復可能性が問題にされうるのである。

科学とは、因果律の信仰に他ならない。それは、事実に対する信仰と言ってもよい。それは、個人の意識を越えた、現象世界の広がりを感じるということであり、自分自身もその世界の一部に過ぎないということを認識することである。それは一つの信仰である。なぜならば、それは言葉によって証明できないからである。事実が存在するということが、客観的な世界が存在するということは、あまりにも自明な

の世界にはまだ山ほどいるようであるから。

ことなので、言葉によって証明することができない。だからこそ、言葉に囚われた哲学者や宗教家は、事実の存在を否定し、科学の正しさを否定する。言葉の上でそれを否定することは簡単である。

では、我々は、彼らの無知を治してやることはできないのだろうか。彼らが誤った考えに陥り、世間の人々を惑わせているのを、ただ見ていることしかできないのか。

そうではない。実際には、彼らを議論によって打ち破る方法がある。あらゆる哲学者や宗教家の世迷言を、完膚なきまでに粉碎し尽くす方法がある。それが中の道である。それは、相手の議論の矛盾を指摘することである。こちらでは何の前提も用意しないで、相手に好きなだけ持論を展開させる。その上で、相手が用いた前提を取り上げて、その矛盾を指摘するのである。これをやられると、誰も反論できなくなる。立脚点を崩されるからである。

そのための議論の方法をまとめたのが、中論である。中の道を実践するためには、まず、あらゆる哲学的議論に精通する必要がある。人間が考えるあらゆる思想は、梵網経の中に列挙されている。また中論のなかには、人間が展開しうるあらゆる哲学的な議論が網羅されている。それを学び尽くすことで、どんな議論をも粉碎できるようになる。キリスト教もイスラム教もギリシャ哲学も近代哲学も、すべての思想は中論のなかに収められ、そして悉く論破されている。あらゆる議論はすでに終わっているのである。我々にはもはや、議論すべきことは何一つ残されていない。

しかし、為すべきことはまだある。議論の消滅を知らない愚か者どもに、その事実を伝えてやらねばならないのである。三千世界を遍く照らす、金剛不壊なる仏陀の智慧の光の前では、あらゆる議論は無力であることを教えてやらねばならない。それを知らない愚か者が、こ